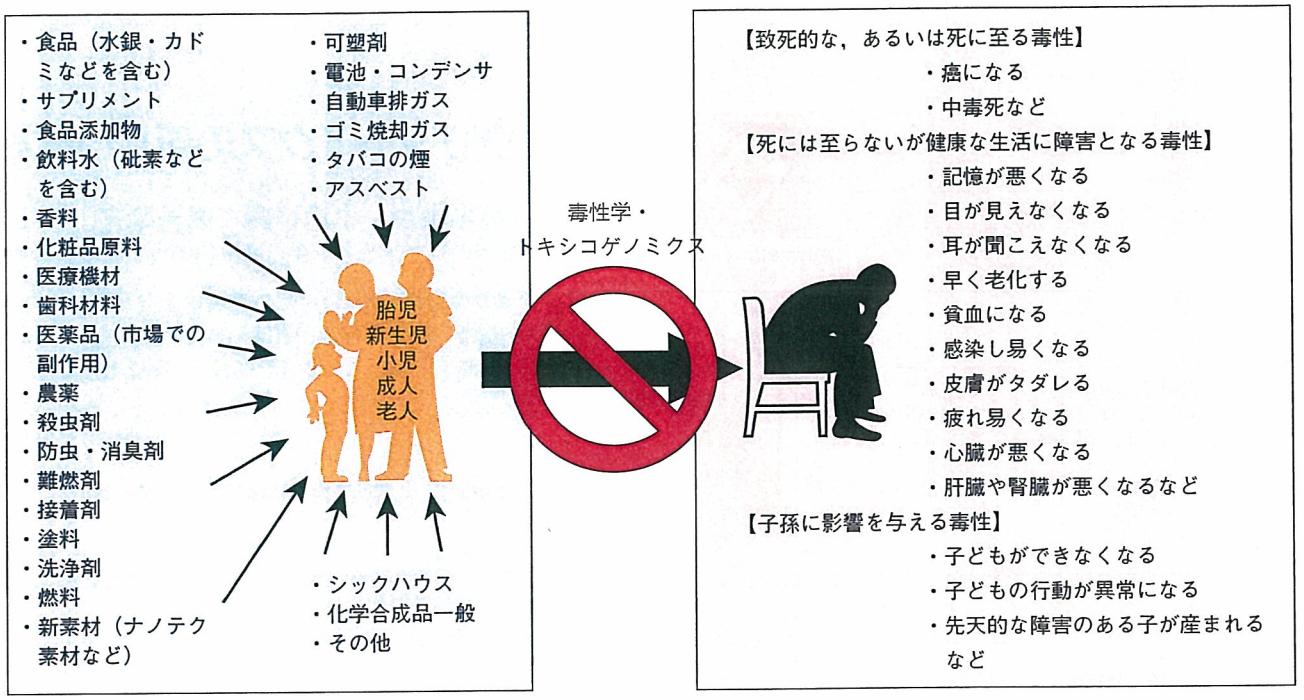

図1. 毒性学の対象

毒性学は，身の回りの物質が引き起こす障害を予測し，その発生を未然に防ぐことを目的としている．トキシコゲノミクス（毒性ゲノミクス）は，最先端の網羅的遺伝子発現解析技術を用いて，従来の毒性学の予測の精度を著しく向上，迅速化させることで，国民の健康安全の確保にさらに貢献することを目指している．

中である．カクテルとも共同研究ベースで供給可能である（連絡先：kanno@nihs.go.jp）．また，ERCC（The External RNA Control Consortium）と連絡をとるとともに，国際的標準化への関与を深めるため平成18年度厚労科研費「医薬品などの有効性・安全性評価に資する遺伝子発現解析の国際的標準化に関わる研究（H18-特別-指定-023）」を立ち上げた．現在，この他にシックハウス症候群を考慮した低用量域での吸入毒性トキシコゲノミクス，1匹のマウスから多臓器を採取しそれらの連携状況をトランスクリプトームから解析する多臓器トキシコゲノミクスを開始し，特徴的な遺伝子について組織内の発現分布を*in situ*ハイブリダイゼーションで確認する作業を並行している．また，下記の3次元データをweb公開するサーバを整備し，一部の化合物から3次元多層（Millefeuille）データを順次閲覧可能とした（http://toxicomics. nihs.go.jp/db/）．

Ⅱ．3次元多層（Millefeuille）データシステム：生物系研究者に優しいデータ可視化と解析

医薬品を含む毒性既知の90化合物について単回経口投与後のトランスクリプトームデータを取得して，初期応答遺伝子カスケードを解析するための基盤データベースを構築した．現在，第二段階として反復暴露データ集積を開始した．データは，用量軸，時間軸，および遺伝子発現軸から成る3次元表示により，遺伝子発現の用量および時間に依存した変化を1枚の曲面として表すことで可視的に変化を判別しやすいように配慮した（図2）．これにより，コンピュータが選び出した遺伝子クラスターの中身を確認する際，特に，mRNAの合成分解のスピードなどの知見から生物学的にありえないパターン（用量軸の方向にも時間軸の方向にもジグザグな変化など）を排除する際に威力を発揮している．

1つの実験から排出されるGeneChip約50枚のデータを一括処理する能力を持ったPercellome自動換算・データ品質管理（QC）に関わるソフトウエアに加えて，3次元多層（Millefeuille）データに最適化した，発現パターン類似性による候補遺伝子検索，およびそれを発展させた教師無しクラスタリング[3]を中心とした解析システム（MF System，MFシリーズ，開発：相﨑健一）を独自に実用化し，開発継続中である（図3）．これらにより，データQCはその日のうちに，基本的な発現情報検索から全遺伝子の教師無しクラスタリングまでを3日間で完遂できるものとなっている．

この基本解析を用いて，発現パターンによって分類された候補遺伝子リストが多数生成される．一部の幸運な例ではただちに新規と思われる毒性関連反応を見いだすことができた．またそうでない場合のための1つの補強手段とし

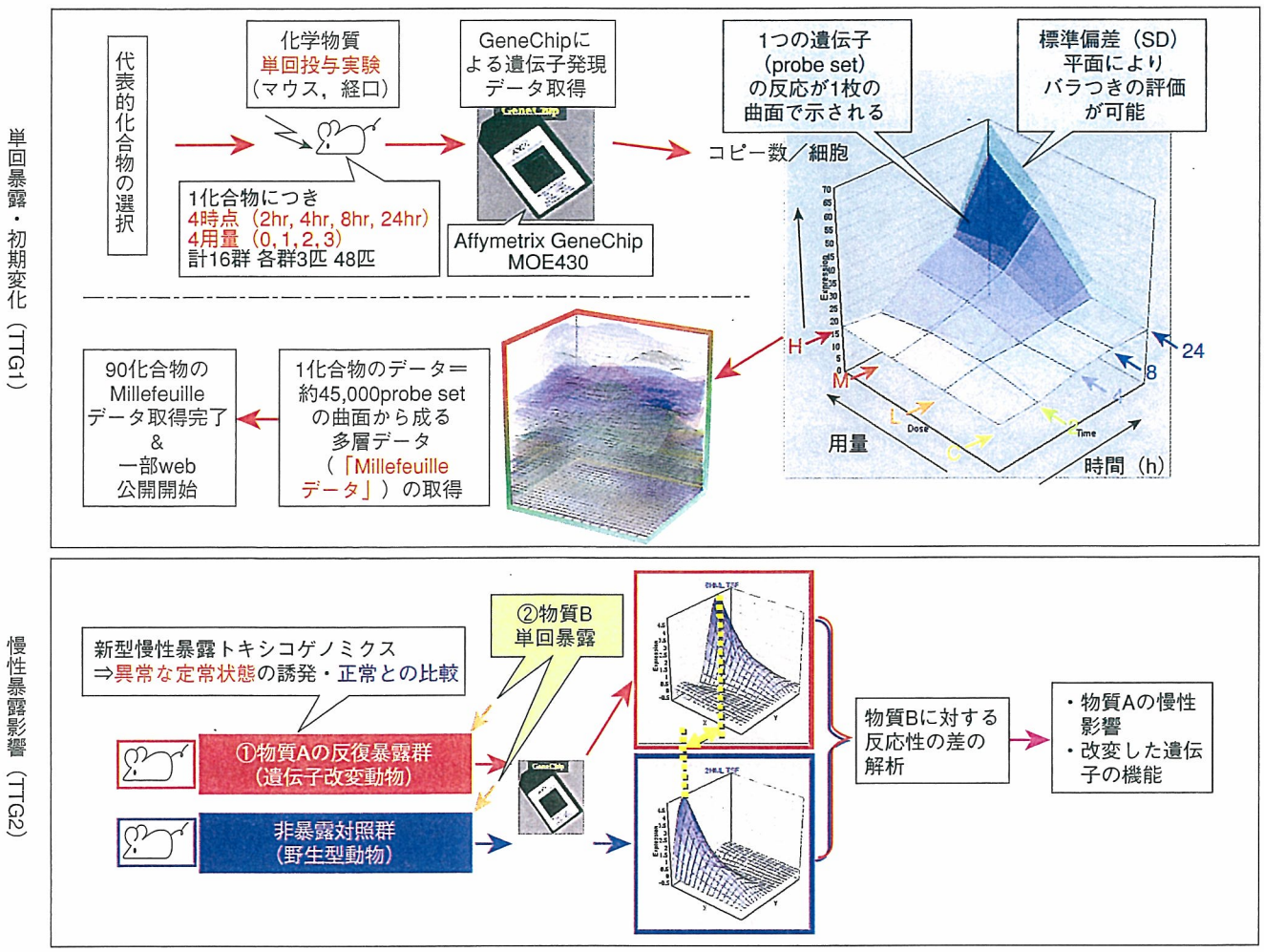

図2. Percellome法と3次元表示による多層（Millefeuille）データシステムを用いたプロジェクトの根幹部分の概要
単回投与による遺伝子発現初期変化データを90化合物について取得（上段）．現在，反復投与の影響を検討中（下段）．H；高用量（high），M；中用量（medium），L；低用量（low），C；コントロール（control）．

て，Gene Ontologyなどの既存知識を利用して候補遺伝子リストの理解を支援するソフトウエア（MF GoPlot）を用意した．このツールは一種の化合物クラスタリングとしても利用することができる．

さらに候補遺伝子リストを基に複数化合物間比較を行い，複数条件下においても同期して発現する遺伝子群を自動抽出するシステムも開発済みである．本システムで得られた同期遺伝子群はシグナルカスケードの構成単位である可能性があり，データベース化しつつ，その解析を進めている（5TB規模のデータベース部分および，大量計算アルゴリズム実装は（株）NTTコムウェアおよび（株）日本NCR/Teradataとの共同開発による）．

Ⅲ．Percellome手法のリアルタイムPCRを含む他のプラットホームへの適用

Percellome手法は，GSCの受け入れ条件を整えることにより，様々なプラットホームに適用可能である．その1つとして最も定量性が高いとされるリアルタイムPCR（ABI PRISM 7900 HT・96ウェルプレート）への適用例を示す．現行のRT-PCR絶対定量法では，遺伝子ごとに検量線が必要であり，多数のサンプルについて多数の遺伝子を検討するには不向きである．Percellome RT-PCRでは，マイクロアレイと同様の原理を用いる．すなわち，サンプル破砕液に，その細胞数に比例する量のスパイクカクテル（GSC）を添加し，それらのCt値をPCRプレートごとの検量線とすることにより，測定したい遺伝子のCt値を細胞1個当たりのmRNAコピー数に換算する．これにより，GAPDHやActinなどのハウスキーピング遺伝子が変動してしまう際の問題，例えば，少数の遺伝子を検討する際にGlobal normalization法を適用し難い問題などが解決される．共通サンプルを測定しデータを比較することにより，Affymetrix GeneChipのPercellome結果と9割程度の整合性が確認され，

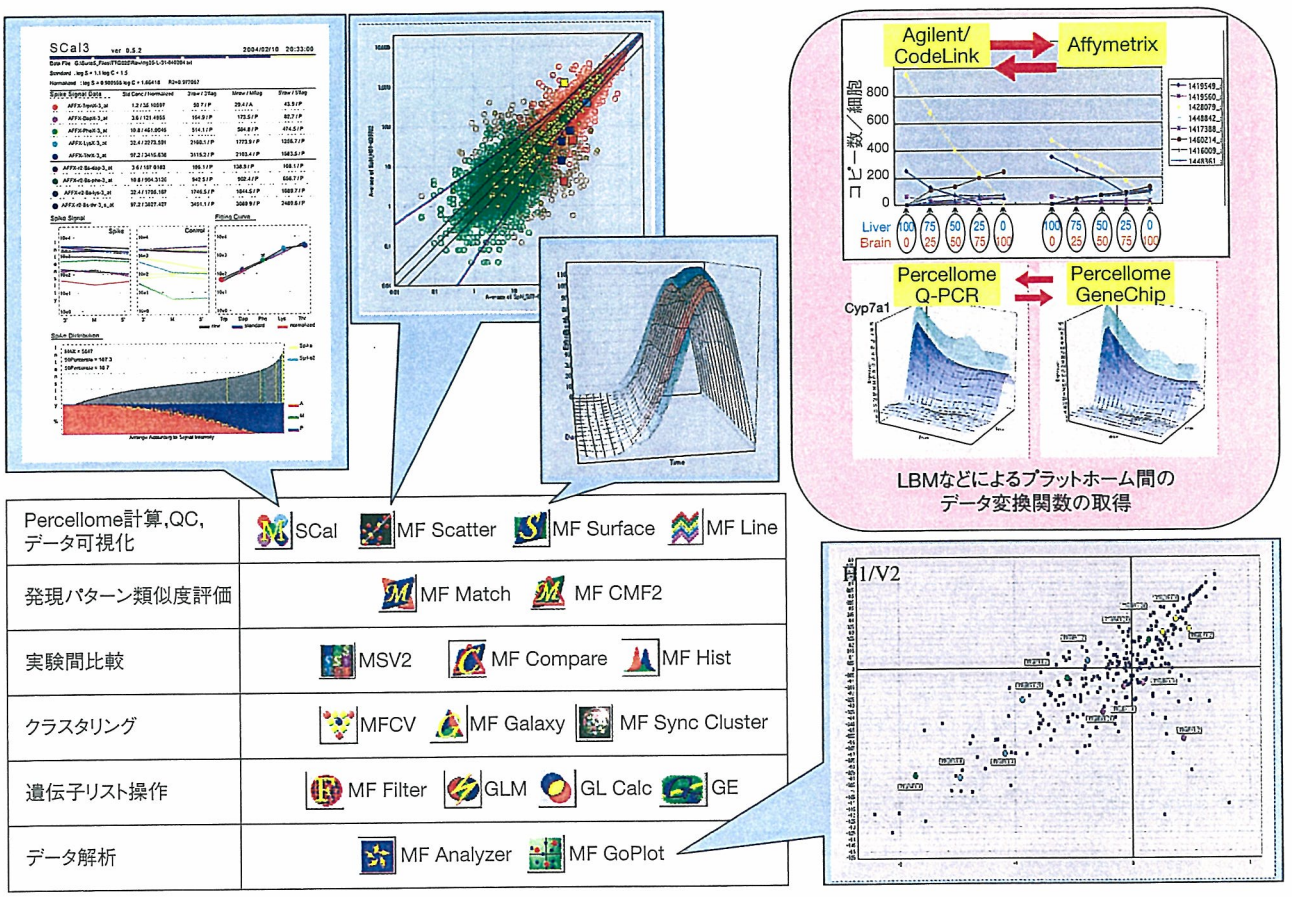

図3. 3次元多層（Millefeuille）データの解析などに用いる独自開発プログラム群

品質管理とともにPrecellome計算を自動的に実施するSCal，Plotソフトウエア，3次元曲面の描画ソフト（MF Surface），など．右上はプラットホーム間のデータ変換情報の得方を示す．LBMを用いる方法（上段）と，実際の実験サンプルを用いる方法（下段）がある．いずれも，一度，両方のプラットホームでそれらのサンプルを測定する必要がある．

GeneChipとPercellome RT-PCRとの間でのコピー数の換算式がいくつかの遺伝子について得られている．この他に，Agilent社製の単色マイクロアレイとCodeLinkアレイにGSCを測定可能なカスタムアレイを用意し終え，LBMサンプルのデータなどをもとに，これらとの間の換算式も得つつある（図3右上）．

Percellome法は，Affymetrixの新しいエキソンアレイの定量性・直線性の検討にも適応可能である．Affymetrix社のHuman Exon 1.0 ST Arrayと従来型の発現アレイHuman Genome U133 plus 2について，性質の異なるヒト癌細胞株2株から調製したLBM様標準サンプル（100：0，75：25，50：50，25：75および0：100混合5サンプル）による比較を行い，両アレイ間の相関性の高いprobe setを多数検出することができた．また，既知のエキソンに対して設計されたprobe setでは発現が見られ，イントロンに対して設計されたprobe setでは発現が見られない，あるいは，既知のsplicing variantに対応したprobe setの発現が検出された，などの基本性能が確認された．しかし，Percellome法を適用して未知のsplicing variantの検出力を向上させるためには，現状では各エキソン間の定量性に問題があることが示唆された．定量値を算出する補正アルゴリズムの開発など，何らかの対策が必要であることが考えられ，現在，Affymetrix社に確認を行っている．

Ⅳ．核内受容体原性毒性のPercellomeトキシコゲノミクス解析

受容体原性毒性とは，化学物質が受容体（リガンド依存的転写因子を含む）に選択的に結合してシグナルをかく乱し，その結果生じる有害性を指す．代表例としてはダイオキシンが挙げられる．AhR（Arylhydrocarbon receptor）ノックアウトマウスでは，ダイオキシンを大量に投与しても毒性がほとんど観察されない．すなわち，野生型マウスがダイオキシンで死ぬメカニズムには，AhRが必須であり，AhRからの異常なシグナルがマウスを死に至らせていることに

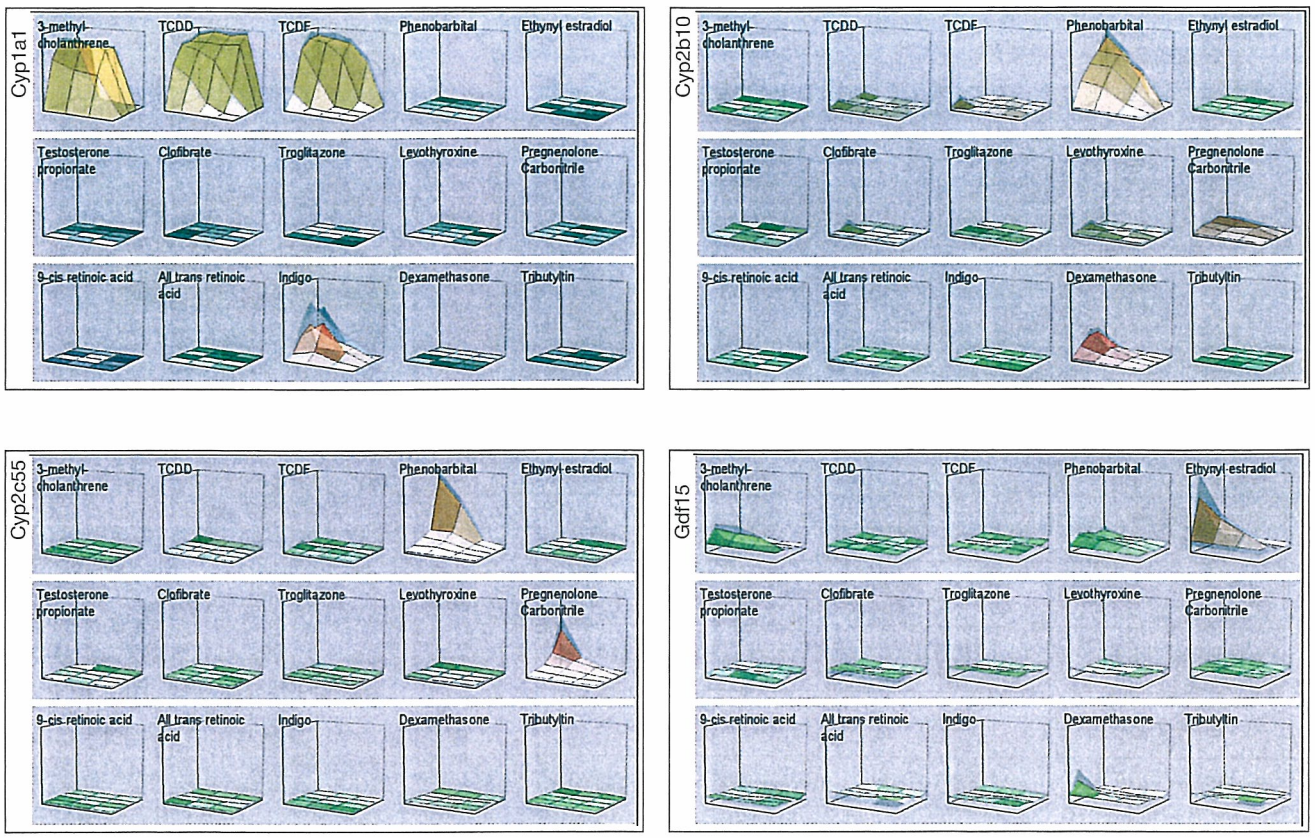

図4. 化合物間の発現比較

15種類の核内受容体リガンド化合物（各3次元グラフ内に表示）によるCyp1a1（左上），Cyp2c55（左下），Cyp2b10（右上）および，Gdf15（右下）の遺伝子発現を3次元表示したもの．各軸は，図2のとおり．縦軸のスケールは遺伝子ごとに共通．リガンドに選択的な遺伝子の発現が確認される．

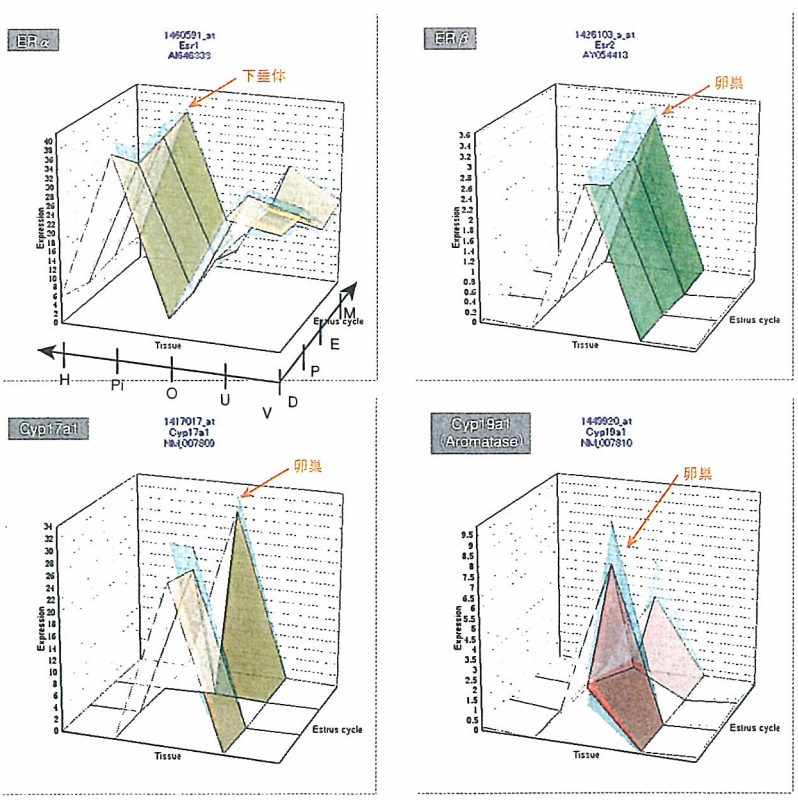

図5. 臓器間の発現比較

マウスの性周期（Diestrus，Proestrus，Estrus，Metestrusの4日間で1周期）ごとの視床下部（H），下垂体（Pi），卵巣（O），子宮（U）および膣（V）における，ERα，ERβ，Cyp17a1（steroid-17α-hydroxylase），およびCyp19a1（Aromatase）の遺伝子発現変動を3次元表示したもの．後二者の酵素は卵巣において周期性を持って発現している．

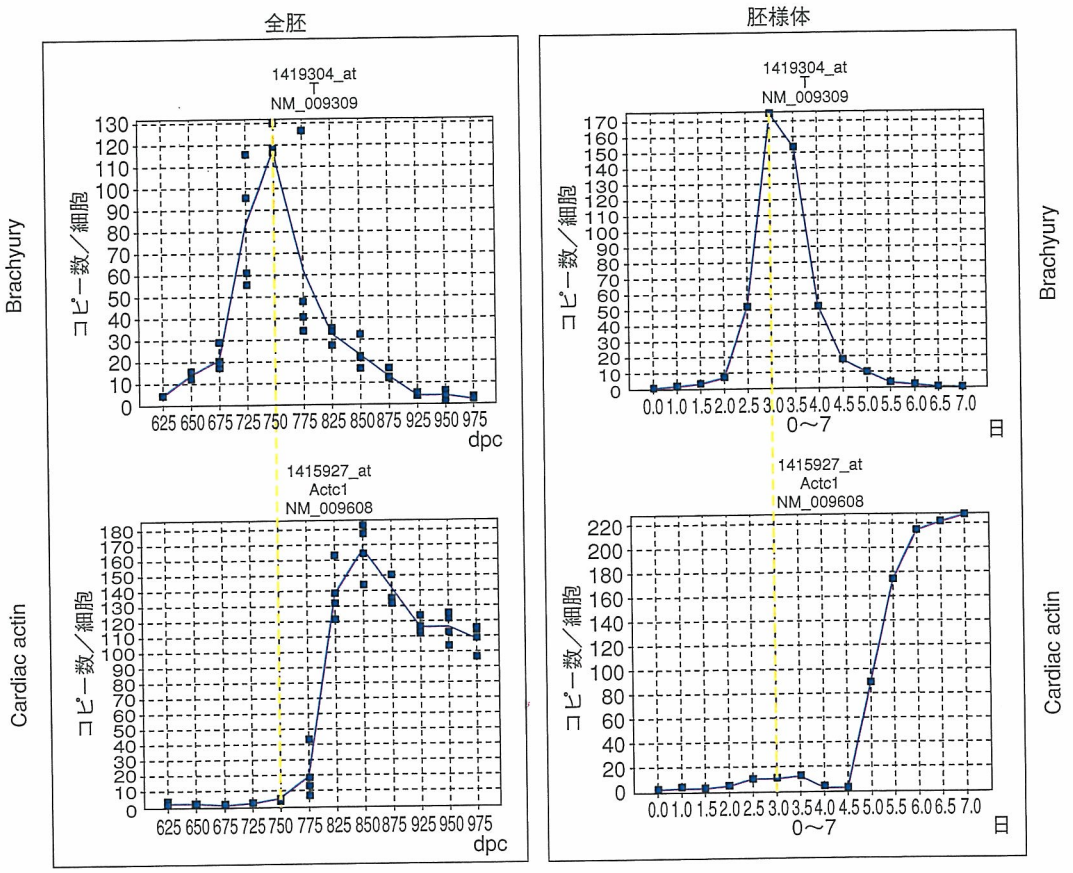

図6. マウス胎児（全胚）と胚様体の発現比較

マウス全胚の胎生6.25日〜9.75日までの遺伝子発現と，胚様体の1日〜7日目までの遺伝子変動の網羅的データベースから，初期中胚葉分化マーカーであるBrachyury遺伝子と，Cardiac actin遺伝子の経時変化を示す．

なる．エストロジェン活性化学物質による有害影響（内分泌かく乱化学物質問題）も同様にER（estrogen receptor）を介する受容体原性毒性と考えられ，胎生期にERを発現する組織が，低用量シグナルかく乱影響の重要標的であると考えられている．

ここでは，受容体原性毒性研究の基盤として，Percellome手法を適用して，①核内受容体作動性物質によるマウス雄肝臓の遺伝子発現変動，②性周期に伴うマウス雌生殖器遺伝子発現変動，③生後の発達過程におけるマウス雌生殖器遺伝子発現変動，の3種類のデータベースを構築した．例えば，①では10種類の核内受容体に作用する典型物質について，単回経口投与後，2，4，8，24時間目の変動を解析し，Ethynyl-estradiolがGDF15，TCDDがCyp1a1，9-cis Retinoic AcidがCyp26a1，DexamethasoneがCyp2b10，ClofibrateがCyp4a14，PCNがCyp2c55など，各々の受容体に特徴的な遺伝子発現を誘導するところがとらえられている（図4）．②の性周期データベースは視床下部，下垂体，卵巣，子宮，膣を対象としており，性周期との関連が網羅的にとらえられている（図5）．これらのデータベースは，今後，各種の候補物質が引き起こす変化を詳細に解析する際の基準として利用される．

V．発生トキシコゲノミクスへの応用

発生毒性学は，個体発生過程におけるダイナミックな遺伝子発現調節の分子機構を把握することにより，さらに正確なものに補強されると考える．現在，C57BL/6マウス胚の器官形成期初期にあたる胎生6.5〜9.5日（プラグ確認日：0.5日）の，①全胚の遺伝子発現変動解析，②遺伝子欠失マウス全胚との比較，および③標的が明らかな既知発生毒性物質投与による本データベースの具体的な適用，を実施している．①についてはすでに0.25日間隔（Time point 計12点）の遺伝子発現データベースを得て，②遺伝子欠失胚のデータといくつかの注目すべき遺伝子についてはwhole mount ISHを用いた発現の検証を加えた．これと並行して，ES細胞からhanging drop法で得た胚様体の0.5日間隔の遺伝子発現データとの比較を実施している．個体発生に関与

する遺伝子群の多くは経時的に激しく変化しており，既知発生毒性物質投与実験については標的遺伝子シグナルカスケードを解析中である（図6）．

おわりに

ノーザンブロットでは実験サンプルにだけバンドが見られ，対照サンプルには遺伝子発現がないという結果を得ても，細胞1個当たりで定量してみると，対照が10コピーに対して実験サンプルが20コピーである場合がある．“無”が“有”になったのではなく，“10”が“20”になったのである．

さて，筆者らの属する毒性学でも，医学の分野でも，疾患概念や毒性概念が整理され，患者や実験動物を診断する際には，まず，そのどれに当てはまるかを検討する．すなわち，どの“典型”に近い症例であるかを検討することから始まることが多い．

しかし，最近の医学・生物学には多因子疾患・多因子形質発現制御の概念が導入され，今から何年かの後には，“21世紀初頭までは，患者の遺伝子多型を調べずして治療を行っていた時代”として，“血液型を調べずに輸血していた時代”と並び称されるようになる可能性がある．このような多因子概念が定着すると，その多くは，“有（100%）”“無（0%）”の組み合わせではなく，“70%”“50%”“90%”といった半端な数の組み合わせであることが考えられる．すなわち，今までの離散値的な“典型”例を基準とするアプローチから，連続値的な病態“スペクトラム”を直接扱うアプローチに変革していく可能性が考えられる．その際の網羅的データの解析とその蓄積の必要性を考えるとき，遺伝子発現データの定量化・標準化という問題は，今まで以上に重みを増すと考えられる．生命現象の網羅的解析にはトランスクリプトームだけでは不十分であることは自明であるが，この定量性を確保することは，これから実現されるであろう網羅的プロテオミクスなどの基盤としても重要ではないかと考える．

マイクロアレイなどから得られるトランスクリプトーム情報が，今後の医薬品審査や化学物質の安全性評価の際に必須なものとなる時代がすぐそこまで来ていることを念頭に，筆者らはPercellome法をさらに展開し，Percellome Projectデータベースを可能な限り高精度に保ちつつ毒性学的な内容を充実させるべく最大限の活動を継続して行く所存であるが，この技術，あるいは研究内容が毒性学以外の研究分野にもお役に立つことができれば幸甚である．

謝辞　本システムの開発とプロジェクトの遂行に当たっては，当毒性部の全メンバー，特に松田菜恵，辻 昌貴，森田紘一，今井あや子，安東朋子，安部麻紀，森山紀子，近藤優子，青柳千百合，相原妃佐子，渡辺 忍の各氏の卓越した働きに深謝する．本研究は厚生労働科学研究費補助金H13-生活-012，H13-生活-013，H14-トキシコ-001，H15-化学-002，H18-化学-一般-001などによる．

文献

1) Kanno J, et al: BMC Genomics (2006) 7: 64
2) 菅野 純ら: 細胞工学 (2004) 23: 685-693
3) Matsumoto S, et al: Genome Informatics (2005) 16: 183-194

Available online at www.sciencedirect.com
ScienceDirect
Reproductive Toxicology 22 (2006) 672–678
Reproductive Toxicology
www.elsevier.com/locate/reprotox

Prenatal developmental toxicity study of the basic rubber accelerator, 1,3-di-*o*-tolylguanidine, in rats

Makoto Ema [a,*], Sakiko Fujii [b], Mariko Matsumoto [a], Akihiko Hirose [a], Eiichi Kamata [a]

[a] *Division of Risk Assessment, Biological Safety Research Center, National Institute of Health Sciences, 1-18-1 Kamiyoga, Setagaya-ku, Tokyo 158-8501, Japan*
[b] *Safety Research Institute for Chemical Compounds Co., Ltd., Sapporo Japan*

Received 28 December 2005; received in revised form 26 April 2006; accepted 4 May 2006
Available online 16 May 2006

Abstract

Pregnant rats were given 1,3-di-*o*-tolylguanidine (DTG) by gavage at 0, 10, 20 or 40 mg/kg bw/day on days 6–19 of pregnancy and the pregnancy outcome was determined on day 20 of pregnancy. At 40 mg/kg bw/day, deaths were observed in four out of 24 females. The incidences of females showing mydriasis at 20 and 40 mg/kg bw/day and showing decreased locomotor activity at 40 mg/kg bw/day were significantly increased. Alopecia, bradypnea, prone position and tremor were also observed at 40 mg/kg bw/day. The maternal body weight gain at 20 and 40 mg/kg bw/day and food consumption at 40 mg/kg bw/day were significantly reduced. A significantly decreased weight of the gravid uterus, increased incidence of postimplantation loss, decreased number of live fetuses, and lowered weights of fetuses and placentae were found at 40 mg/kg bw/day. The incidences of the total number of fetuses with external malformations at 40 mg/kg bw/day and with skeletal malformations at 20 and 40 mg/kg bw/day were significantly increased. Significantly higher incidences of fetuses with brachydactyly and short tail and defects of caudal vertebrae, phalanges and metacarpals were observed at 40 mg/kg bw/day. Delayed ossification was also noted at 40 mg/kg bw/day. The data indicate that DTG is teratogenic at maternal toxic doses and the NOAELs of DTG for maternal and developmental toxicity are 10 mg/kg bw/day in rats.

Keywords: Di-*o*-tolylguanidine; Rubber accelerator; Sigma ligand; Prenatal developmental toxicity; Teratogenicity; Malformation; Rat

1. Introduction

1,3-Di-*o*-tolylguanidine (CAS No. 97-39-2; DTG) is produced in the million pound range annually in the USA [1] and used as a basic rubber accelerator [2]. DTG is known to be a selective ligand receptor for the sigma site in the mammalian central nervous system [3]. Many findings have suggested that the sigma site plays a role in movement and posture through its association with brainstem and forebrain motor control circuits [4]. DTG has been reported to cause hypothermia after intraperitoneal injection in mice [5] and subcutaneous or intracerebroventricle injection in rats [6,7]. Intraperitoneal injection of DTG reduced the pain behavior in the acute phase, but increased pain behavior in the tonic phase in the formalin test in mice [8], and produced significant, but short-lived, increases in the withdrawal latencies in mice [5]. In rats, DTG also caused circling behavior after unilateral intranigral injection [4], decreased locomotor activity after intraperitoneal injection [9,10], increased bladder capacity after intravenous injection in the anaesthetized condition [11], and no change in immobility time in the forced swimming test after intraperitoneal injection [12].

It is generally assumed that the biological effects produced by chemicals should be studied in laboratory animals to investigate possible influences in human health, and the results of animal tests on chemical toxicity are relevant to humans [13]. Toxicological studies on DTG have given little information on acute animal toxicity [14]: intraperitoneal LD50 was 25 mg/kg bw in mice; the oral LD50 was 500 mg/kg bw in rats; the lowest published lethal dose of oral administration was 80 mg/kg bw in rabbits; and the lowest published lethal dose was 120 mg/kg bw after oral administration in mammals, species unspecified. We recently investigated the reproductive and developmental toxicity of DTG, according to the OECD guideline 421 reproduc-

* Corresponding author. Tel.: +81 3 3700 9878; fax: +81 3 3700 1408.
E-mail address: ema@nihs.go.jp (M. Ema).

0890-6238/$ – see front matter © 2006 Elsevier Inc. All rights reserved.
doi:10.1016/j.reprotox.2006.05.003

tion/developmental toxicity screening test in rats given DTG by gavage at 0, 8, 20 or 50 mg/kg bw/day [15], to obtain the preliminary information on the reproductive and developmental effects of DTG, because the testing for reproductive and developmental toxicity has become an important part of the overall toxicology. Males were given DTG for a total of 49 days beginning 14 days before mating, and females were given DTG for a total of 40–49 days beginning 14 days before mating to day 3 of lactation throughout the mating and gestation period. In this screening study, deaths in both sexes at 50 mg/kg bw/day, lowered body weight gain and food consumption in males at 50 mg/kg bw/day and females at 20 and 50 mg/kg bw/day, and neurobehavioral changes such as mydriasis, decreased locomotor activity, bradypnea, prone position, tremor and/or salivation in both sexes at 20 and 50 mg/kg bw/day were found. Although no effects of DTG were detected on the estrous cyclicity, precoital interval, copulation, fertility and gestation indexes, numbers of corpora lutea and implantations, and gestation length, significant decreases in the number, body weight and viability of offspring and a significant increase in the incidence of fetuses with external malformations were noted at 50 mg/kg bw/day. Oligodactyly, anal atresia and tail anomalies were frequently observed at the highest dose. The total number of fetuses with external malformations, but not individual malformation, was significantly increased at 50 mg/kg, and the teratogenic effect of DTG was strongly suggested. However, this screening test does not provide complete information on all aspects of reproduction and development due to the relatively small numbers of animals in the dose groups and selectivity of the endpoints. Only external examination in the newborn rats was performed, and no internal or skeletal examinations were carried out in this screening test. The prenatal developmental toxicity study was therefore conducted to accurately evaluate the developmental toxicity, including the teratogenicity of DTG in rats.

2. Materials and methods

This study was performed in compliance with OECD guideline 414 Prenatal Developmental Toxicity Study [16] and in accordance with the principles for Good Laboratory Practice [17], "Law for the Humane Treatment and Management of Animals" [Law No. 105, October 1, 1973, revised June 15, 2005] and "Standards Relating to the Care and Management, etc. of Experimental Animals" [Notification No. 6, March 27, 1980 of the Prime Minister's Office].

2.1. Animals

International Genetic Standard (Crj: CD (SD) IGS) rats were used throughout this study. This strain was chosen because it is most commonly used in toxic studies, including reproductive and developmental toxicity studies, and historical control data are available. Males at 11 weeks of age and females at 10 weeks of age were purchased from Atsugi Breeding Center, Charles River Japan, Inc. (Yokohama, Japan). The rats were acclimatized to the laboratory for five days prior to the start of the experiment. Male and female rats found to be in good health were selected for use. Animals were reared on a sterilized basal diet (CRF-1; Oriental Yeast Co., Ltd., Tokyo, Japan) and filtered tap water ad libitum, and they were maintained in an air-conditioned room at 22 ± 3 °C, with a relative humidity of 50 ± 20%, a 12-h light/dark cycle, and ventilation of 10–15 air changes/hour. Virgin female rats were mated overnight with male rats. The day when the sperm in the vaginal smear and/or vaginal plug were detected was considered to be day 0 of pregnancy. The copulated females were distributed into four groups to equalize the female body weights among groups. The copulated females were housed individually.

2.2. Chemicals and dosing

DTG was obtained from Sumitomo Chemical Co., Ltd. (Tokyo, Japan). DTG, a white powder, is slightly soluble in hot water and alcohol, soluble in chloroform, and very soluble in ether, and its melting point is 179 °C, specific gravity is 1.10 and molecular weight is 239.3 [2]. The DTG (Lot no. 34K21) used in this study was 99.5% pure, and it was kept in a dark place at room temperature. The purity and stability of the chemical were verified by analysis before and after the study. Rats were dosed once daily by gastric intubation with DTG at a dose of 0 (control), 10, 20 or 40 mg/kg bw on days 6 through 19 of pregnancy. The dosage levels were determined based on the results of our reproduction/developmental toxicity screening test [15], in which deaths at 50 mg/kg bw/day and neurobehavioral changes and lowered body weight gain and food consumption at 20 and 50 mg/kg bw/day in females, and decreases in the number, body weight and viability of offspring and increased incidence of fetuses with malformations at 50 mg/kg bw/day were found. DTG was suspended in 0.5% (w/v) carboxymethylcellulose–Na solution with 0.1% (w/v) Tween 80. The volume of each dose was adjusted to 5 ml/kg body weight based on daily body weight. The control rats were given only 0.5% (w/v) carboxymethylcellulose–Na solution with 0.1% (w/v) Tween 80. The stability of formulations has been confirmed for up to 8 days. During use, the formulations were maintained under such conditions for less than 7 days, and each formulation was analyzed for concentration of DTG and the results revealed 90.3–99.5% of the intended concentration.

2.3. Observations

All females were observed daily during the pre-administration period and on the day of sacrifice, and twice a day (before and after administration) during the administration period for clinical signs of toxicity. Maternal body weight was recorded on days 0, 3 and 6–20 of pregnancy. Food consumption was recorded on days 0, 3, 6, 9, 12, 15, 18 and 20 of pregnancy. The pregnant rats were euthanized by exsanguination under ether anesthesia on day 20 of pregnancy. The peritoneal cavity was opened, and the uterus was removed from the maternal body and weighed. The numbers of corpora lutea, implantation sites, live and dead fetuses and resorptions were counted. The live fetuses were removed from the uterus and sexed, weighed and inspected for external malformations and malformations within the oral cavity. Approximately one-half of the live fetuses in each litter were randomly selected, fixed in alcohol, stained with alizarin red S and alician blue [18] and examined for skeletal anomalies. The remaining live fetuses in each litter were fixed in Bouin's solution. Their heads were subjected to free-hand razor-blade sectioning [19], and the thoracic areas were subjected to microdissecting [20] to reveal internal abnormalities.

2.4. Data analysis

The statistical analysis of fetuses was carried out using the litter as the experimental unit. Maternal body weight, body weight gain, adjusted weight gain, weight of the gravid uterus, food consumption, numbers of corpora lutea, implantations and live fetuses, fetal weight and placental weight were analyzed for statistical significance as follows. Bartlett's test of homogeneity of variance was used to determine if the groups had equivalent variances at the 5% level of significance. If the variances were equivalent, the groups were compared by one-way analysis of variance. If significant differences were found, Dunnett's multiple comparison test was performed. If the groups did not have equivalences, the Kruskal–Wallis test was used to assess the overall effects. Whenever significant differences were noted, pair-wise comparisons were made using the Mann–Whitney *U*-test. The incidences of pre- and postimplantation embryonic loss and fetuses with malformations and variations and sex ratio of live fetuses were analyzed using Wilcoxon's rank sum test. The rates of pregnancy, nonpregnancy and females showing clinical signs of toxicity were analyzed with Fisher's exact test. The 0.05 level of probability was used as the criterion for significance.

Table 1
Maternal findings in rats given DTG on days 6–19 of pregnancy

Dose (mg/kg)	0 (control)	10	20	40
No. of rats	24	24	24	24
No. of pregnant rats	24	24	24	24
Initial body weight	256 ± 13	256 ± 13	256 ± 13	256 ± 13
No. of females showing clinical sign of toxicity				
Death	0	0	0	4
Alopecia	2	2	3	2
Bradypnea	0	0	0	2
Decreased locomotor activity	0	0	1	11**
Mydriasis	0	0	12**	24**
Prone position	0	0	0	3
Salivation	0	0	2	2
Soil of perigenital	0	0	1	4
Tremor	0	0	0	2
Body weight gain during pregnancy (g)[a]				
Days 0–6	40 ± 8	39 ± 8	40 ± 8	39 ± 8
Days 6–15	50 ± 7	49 ± 9	37 ± 11**	23 ± 10**
Days 15–20	77 ± 9	77 ± 9	71 ± 10	47 ± 16**
Days 0–20	167 ± 17	165 ± 21	148 ± 24**	109 ± 21**
Adjusted weight gain[b]	88 ± 15	87 ± 19	77 ± 15	49 ± 17**
Food consumption during pregnancy (g/day)[a]				
Days 0–6	23 ± 2	23 ± 2	23 ± 2	23 ± 2
Days 6–15	26 ± 2	26 ± 2	24 ± 3	20 ± 3**
Days 15–20	28 ± 2	28 ± 3	26 ± 2	22 ± 3**
Days 0–20	25 ± 2	26 ± 2	24 ± 2	21 ± 2**
Weight of gravid uterus (g)[a]	79 ± 10	78 ± 11	72 ± 15	59 ± 10**

[a] Values are given as the mean ± S.D.
[b] Adjusted weight gain refers to maternal weight gain excluding the gravid uterus.
** Significantly different from the control ($p < 0.01$).

3. Results

Table 1 shows the maternal findings in rats given DTG on days 6–19 of pregnancy. At 40 mg/kg bw/day, death was found on day 8 of pregnancy in two females and on days 7 and 19 of pregnancy in one female each. Statistically significant increases in the incidence of mydriasis occurred at 20 and 40 mg/kg bw/day, and in decreased locomotor activity at 40 mg/kg bw/day. Additional findings that appeared to be treatment related, but not statistically significant were decreased locomotor activity at 20 mg/kg bw/day, salivation and soil of the perigenital area at 20 and 40 mg/kg bw/day, and bradypnea, prone position and tremors at 40 mg/kg bw/day. These signs were observed consistently throughout the dosing period and relatively higher incidences of these signs were noted during the early administration period. Maternal body weight gain was significantly decreased on days 6–15 and 0–20 of pregnancy at 20 mg/kg bw/day, and on days 6–15, 15–20 and 0–20 of pregnancy at 40 mg/kg bw/day. Adjusted weight gain, the net weight gain of maternal rats during pregnancy, and the weight of the gravid uterus were also significantly reduced at 40 mg/kg bw/day. At this dose, food consumption was significantly lowered on days 6–15, 15–20 and 0–20 of pregnancy.

Table 2 presents the reproductive findings in rats given DTG on days 6–19 of pregnancy. No dam with total litter loss was observed in any group. No effects of DTG were found on the numbers of corpora lutea and implantations, or the incidence of preimplantation loss. At 40 mg/kg bw/day, a significantly increased incidence of postimplantation loss, a decreased number of live fetuses and lowered weights of male and female fetuses and placentae were noted. The sex ratio of live fetuses was significantly reduced in the DTG-treated groups.

The summarized results of external and internal examinations in fetuses of rats given DTG on days 6–19 of pregnancy are shown in Table 3. No fetuses with external malformations were observed in the control group. One fetus with cleft palate was found at 10 mg/kg bw/day. Fetuses with external malformations were found in 13 out of the 328 fetuses (three out of the 24 litters) at 20 mg/kg bw/day and 33 out of the 251 fetuses (11 out of the 20 litters) at 40 mg/kg bw/day, and significantly increased incidence of the total number of fetuses with external malformations was noted at 40 mg/kg bw/day. Incidences of fetuses with brachydactyly and with short tail were increased at 20 and 40 mg/kg bw/day, and significantly increased incidences were found at 40 mg/kg bw/day. As for internal malformations, one fetus each with microphthalmia in the control and 20 mg/kg bw/day groups, one fetus with dilatation of the lateral ventricles in the control group and one fetus with undescended testes in the 40 mg/kg bw/day were observed. Variations in the internal organs were observed in 11–19 fetuses in all groups. However, no significant differences in the incidences of

Table 2
Reproductive findings in rats given DTG on days 6–19 of pregnancy

Dose (mg/kg)	0 (control)	10	20	40
No. of litters	24	24	24	20
No. of litters totally resorbed	0	0	0	0
No. of corpora lutea per litter[a]	15.7 ± 2.1	14.8 ± 1.6	14.9 ± 1.9	15.3 ± 1.5
No. of implantations per litter[a]	15.3 ± 1.9	14.7 ± 1.8	14.2 ± 2.7	15.2 ± 1.4
% Preimplantation loss per litter[b]	2.4	0.9	5.6	0.9
% Postimplantation loss per litter[c]	3.5	3.4	4.8	16.4**
No. of live fetuses per litter[a]	14.8 ± 1.9	14.2 ± 2.1	13.7 ± 2.9	12.6 ± 1.9**
Sex ratio of live fetuses (male/female)	0.56	0.49*	0.46*	0.46*
Body weight of live fetuses (g)[a]				
Male	3.64 ± 0.17	3.72 ± 0.18	3.59 ± 0.24	3.19 ± 0.31**
Female	3.42 ± 0.16	3.53 ± 0.25	3.41 ± 0.18	3.03 ± 0.26**
Placental weight (g)[a]	0.47 ± 0.04	0.47 ± 0.03	0.50 ± 0.16	0.40 ± 0.04**

[a] Values are given as the mean ± S.D.
[b] (No. of preimplantation embryonic loss/no. of corpora lutea) × 100.
[c] (No. of resorptions and dead fetuses/no. implantations) × 100.
* Significantly different from the control ($p < 0.05$).
** Significantly different from the control ($p < 0.01$).

fetuses with internal malformations and variations were detected between the control and DTG-treated groups.

The summarized results of skeletal examinations in the fetuses of rats given DTG on days 6–19 of pregnancy are presented in Table 4. Fetuses with skeletal malformations were found in one out of the 184 fetuses (one out of the 24 litters) in the control group, one out of the 176 fetuses (one out of the 24 litters) at 10 mg/kg bw/day, 13 out of the 170 fetuses (six out of the 24 litters) at 20 mg/kg bw/day, and 26 out of the 130 fetuses (12 out of the 20 litters) at 40 mg/kg bw/day. Significantly higher incidences of the total number of fetuses with skeletal malformations were observed at 20 and 40 mg/kg bw/day. Incidences of fetuses with absence, fusion or malposition of the caudal vertebrae and with absence or fusion of phalanges were higher at 20 and 40 mg/kg bw/day, and significantly increased incidences of fetuses with these malformations and fetuses with the absence or fusion of metacarpals were found at 40 mg/kg bw/day. Although skeletal variations in the vertebral column, ribs and sternebrae were observed in all groups, no significant differences in the incidences of fetuses with skeletal variations were detected between the control and DTG-treated groups. A significantly delayed ossification, as evidenced by the numbers of sacral and caudal vertebrae, sternebrae, and metatarsi, was also noted at 40 mg/kg bw/day.

4. Discussion

In order to obtain further information on the reproductive and developmental toxicity of DTG, the present study was conducted in compliance with OECD guideline 414 Prenatal Developmental Toxicity Study [16]. DTG was given to pregnant rats during the time of implantation to the term of pregnancy to

Table 3
External and internal examinations in fetuses of rats given DTG on days 6–19 of pregnancy

Dose (mg/kg)	0 (control)	10	20	40
External examination				
Total no. of fetuses (litters) examined	354 (24)	341 (24)	328 (24)	251 (20)
Total no. of fetuses (litters) with malformations	0	1	13 (3)	33 (11)**
Cleft palate	0	1	0	0
Brachydactyly	0	0	8 (3)	31 (11)**
Short tail	0	0	7 (2)	10 (7)**
Internal examination				
Total no. of fetuses (litters) examined	170 (24)	165 (24)	158 (24)	121 (20)
Total no. of fetuses (litters) with malformations	1	0	1	1
Microphthalmia	1	0	1	0
Dilatation of lateral ventricles	1	0	0	0
Undescended testes	0	0	0	1
Total no. of fetuses (litters) with variations	16 (10)	11 (9)	13 (7)	19 (12)
Thymic remnants in neck	13 (10)	8 (7)	12 (7)	17 (11)
Dilated renal pelvis	2 (2)	2 (2)	0	0
Left umbilical artery	1	1	1	2 (2)

** Significantly different from the control ($p < 0.01$).

Table 4
Skeletal examinations in fetuses of rats given DTG on days 6–19 of pregnancy

Dose (mg/kg)	0 (control)	10	20	40
Total no. of fetuses (litters) examined	184(24)	176(24)	170(24)	130(20)
Total no. of fetuses (litters) with malformations	1	1	13(6)*	26(12)**
Split cartelige of thoracic centrum	0	0	1	1
Fused cartilage of cervical vertebral arches	0	1	1	1
Fused cartilage of ribs	1	0	0	0
Absence, fusion or malposition of caudal vertebrae	0	0	8(3)	10(8)**
Absence or fusion of phalanges	0	0	5(3)	18(9)**
Fusion of metacarpal/metatarsal and phalanx	0	0	0	2(2)
Absence or fusion of metacarpals	0	0	0	4(4)*
Shortening of tibia and fibula	0	0	0	1
Total no. of fetuses (litters) with variations	10(7)	16(9)	16(11)	12(8)
Bipartite ossification of thoracic centrum	0	2(1)	1	0
Dumbbell ossification of thoracic centrum	0	1	0	0
Unossified thoracic centrum	1	1	0	1
Variation of number of lumbar vertebrae	1	0	0	2(1)
Wavy ribs	0	1	1	0
Short supernumerary rib	9(6)	12(7)	14(10)	4(4)
Short 13th rib	0	0	0	2(2)
Sacralization of lumbar vertebra	0	0	0	2(1)
Bipartite ossification of sternebra	0	0	1	1
Asymmetry of sternebra	0	0	0	1
Degree of ossification[a]				
No. of sacral and caudal vertebrae	7.3 ± 0.5	7.5 ± 0.5	7.5 ± 0.5	7.0 ± 0.6*
No. of sternebrae	4.6 ± 0.4	4.8 ± 0.5	4.6 ± 0.4	4.2 ± 0.4*
No. of metatarsals	8.0 ± 0.0	7.9 ± 0.3	7.8 ± 0.4	6.7 ± 1.4*

[a] Values are given as the mean ± S.D.
* Significantly different from the control ($p < 0.05$).
** Significantly different from the control ($p < 0.01$).

characterize the effects of DTG on embryonic/fetal development. The findings of the present study confirmed the results of a previous screening study and extended the understanding of the reproductive and developmental toxicity of DTG. The present data showed that the prenatal oral administration of DTG produced maternal toxicity, as evidenced by deaths, neurobehavioral changes, decreased body weight gain and reduced food consumption, and developmental toxicity, as evidenced by a high incidence of postimplantation loss, a decreased number of live fetuses and lower weight of fetuses, and teratogenicity, as evidenced by a higher incidence of fetuses with external and skeletal malformations.

DTG is a specific sigma receptor ligand [3] and sigma receptor ligands can modulate neurotransmissions, including the noradrenergic, glutamatergic and dopaminergic system [10,21,22]. The systemic injection of DTG has been reported to cause neurobehavioral changes in rats [4,6,7,9,22]. The present study shows that the oral administration of DTG also induced neurobehavioral changes at 20 and 40 mg/kg bw/day in pregnant rats. Lowered body weight gain at 20 and 40 mg/kg bw/day and food consumption at 40 mg/kg bw/day were also observed in pregnant rats. These findings indicate that DTG is maternally toxic at 20 mg/kg bw/day and higher.

The sex ratio (males/females) was significantly lowered in all DTG-treated groups. The values for sex ratio were 0.429–0.521 in the background control data for the last 6 years in the laboratory performed present study. Statistically significant changes in the sex ratio observed in the present study were considered to be unrelated to the administration of DTG, because the values for sex ratio in the DTG-treated groups were within the range of the historical control data, no increased embryonic/fetal deaths were detected at 10 and 20 mg/kg bw/day and the control value for the sex ratio was very high in the present study. A decreased number of live fetuses, increased incidence of postimplantation loss, and reduced weights of fetuses and placentae were detected at 40 mg/kg bw/day. A decreased number of live fetuses and increased incidence of postimplantation loss indicate embryonic/fetal lethality, and reduced weights of fetuses and placentae indicate intrauterine growth retardation. These findings indicate that DTG is toxic to embryonic/fetal survival or fetal growth at 40 mg/kg bw/day when administered during the time of implantation to the term of pregnancy.

In our previous reproductive and developmental screening test [15], the total number of fetuses with external malformations, but not individual malformation, was significantly increased at 50 mg/kg. At this dose, oligodactyly and tail anomalies were frequently observed, and the teratogenic effect of DTG was strongly suggested. No malformed fetuses were found at 20 mg/kg bw/day in our previous study. In the present study, morphological examinations in the fetuses of exposed mothers revealed increased incidence of fetuses with external and skeletal malformations at 20 and 40 mg/kg bw/day.

Fetuses with external, internal and/or skeletal malformations and/or variations were found in all groups. The malformations and variations observed in the present study are of the types that occur spontaneously among the control rat fetuses [23–26]. At 40 mg/kg bw/day, significantly higher incidences of the total number of fetuses with external and skeletal malformations were detected, and significantly higher incidences of individual types of external and skeletal malformation were also noted. At 20 mg/kg bw/day, the incidence of the total number of fetuses with skeletal malformations was significantly higher than that of control group. Although the incidence of individual types of skeletal malformation was not significantly increased at 20 mg/kg bw/day, types of external and skeletal malformations observed at this dose were the same as those observed at 40 mg/kg bw/day. Consideration of the sum of these findings suggests that a conservative estimate of the LOAEL for the teratogenic dose of DTG is 20 mg/kg bw/day in rats when administered during the time of implantation to the term of pregnancy. DTG caused suppression of body weight gain and neurobehavioral changes in dams and abnormally morphological development and developmental delay in the offspring of rats at 20 and 40 mg/kg bw/day. Therefore, the teratogenic effects of DTG at doses without maternal toxicity, a selective teratogenicity of DTG, was not found in the current study. There are no available reports in which the developmental toxicity of DTG is assessed in any other animal species. Further studies are needed to confirm the reproductive and developmental toxicity of DTG in additional species. Developmental neurotoxicity and multigeneration studies are also required to support the conclusion of the prenatal hazard of DTG.

In conclusion, DTG caused maternal neurobehavioral changes and decreased body weight gain at 20 mg/kg bw/day and higher, embryonic/fetal deaths and lowered fetal weight at 40 mg/kg bw/day, and increased incidence of fetuses with malformations at 20 mg/kg bw/day and higher when administered during the time of implantation to the term of pregnancy in rats.

Acknowledgements

This study was performed in 2005 at the Safety Research Institute for Chemical Compounds Co., Ltd. (Sapporo, Japan) and supported by the Ministry of Health, Labour and Welfare, Japan.

References

[1] Scorecard. Chemical profile for 1,3-bis(*o*-tolyl)guanidine (CAS number: 97-39-2) 2005. http://www.scorecard.org/chemical-profiles/summary.tcl?edf_substance_id=+97-39-2.

[2] TOXNET. *N,N'*-bis(2-methylphenyl)guanidine 2005. http://toxnet.nlm.nih.gov/cgi-bin/sis/search/f?/temp/.

[3] Weber E, Sonders M, Quarum M, Mclean S, Pou S, Keana JFW. 1,3-Di(2-(5-^{3}H)tolyl)guanidine: a selective ligand that labels σ-type receptors for psychotomimetic opiates and antipsychotic drugs. Proc Natl Acad Sci 1986;83:8784–8.

[4] Bastianetto S, Perralt G, Sanger DJ. Pharmacological evidence for the involvement of sigma sites in DTG-induced contralateral circling in rats. Neuropharmacology 1995;34:107–14.

[5] Kest B, Mogil JS, Sternberg WF, Pechnick RN, Liebeskind JC. Antinociception following 1,3-di-*o*-tolylguanidine, a selective σ receptor ligand. Pharmacol Biochem Behav 1995;50:587–92.

[6] Bejanian M, Pechnick RN, Bova MP, George R. Effects of subcutaneous and intracerebroventricular administration of the *sigma* receptor ligand 1,3-di-*o*-tolylguanidine on body temperature in the rat: interactions with BMY 14802 and rimcazole. J Phamacol Exp Ther 1991;258:88–93.

[7] Rawls SM, Baron DA, Geller EB, Adler MW. Sigma sites mediate DTG-evoked hypothermia in rats. Pharmacol Biochem Behav 2002;73:779–86.

[8] Kest B, Mogil JS, Sternberg WF, Pechnick RN, Liebeskind JC. 1,3-Di-*o*-tolylguanidine (DTG) differentially affects acute and tonic formalin pain: antagonism by rimcazole. Phamacol Biochem Behav 1995;52:175–8.

[9] Maj J, Rogóż Z, Skuza G. Some behavioral effects of 1,3-di-o-tolylguanidine, opipramol and seritraline, the sigma site ligands. Pol J Pharmacol 1996;48:379–95.

[10] Skuza G, Rogóż Z. Effects of 1,3-di-*o*-tolylguanidine (DTG), rimcazole and EMD 57445, the σ receptor ligands, in the forced swimming test. Pol J Phamacol 1997;49:329–35.

[11] Shimizu I, Kawashima K, Ishii D, Oka M. Effects of (+)-pentazocine and 1,3-di-*o*-tolylguanidine (DTG), sigma (σ) ligands, on micturition in anaesthetized rats. Br J Pharmacol 2000;131:610–6.

[12] Skuza G, Rogóż Z. Sigma 1 receptor antagonists attenuate antidepressant-like effect induced by co-administration of 1,3-di-*o*-tolylguanidine (DTG) and memantine in the forced swimming test in rats. Pol J Phamacol 2003;55:1149–52.

[13] Clayson DB, Krewski DR. Objectives of toxicity testing. In: Arnold DL, Grice HC, Krewski DR, editors. Handbook of in vivo toxicity testing. San Diego: Academic Press; 1990. p. 3–18.

[14] RTECS (The Registry of Toxic Effects of Chemical Substances) Guanidine, 1,3-di-*o*-tolyl-; 2005. http://www.cdc.gov/niosh/rtecs/mf155cc0.html.

[15] Ema E, Kimura E, Matsumoto M, Hirose A, Kamata E. Reproductive and developmental toxicity screening test of basic rubber accelerator, 1,3-di-*o*-tolylguanidine, in rats. Reprod Toxicol, in press.

[16] OECD (Organisation for Economic Co-operation and Development). OECD Test Guideline for Testing of Chemicals, No. 414, Prenatal Developmental Toxicity Study. Adopted by the Council on 22nd January 2001. Paris.

[17] ME, MHLW, MITI (Ministry of Environment, Ministry of Health, Labour and Welfare, and Ministry of International Trade and Industry of Japan). Research of Designated Chemical Substances, November 2003. Tokyo.

[18] Inouye M. Differential staining of cartilage and bone in fetal mouse skeleton by alcian blue and alizarin red S. Congenit Anom Kyoto 1976;16:171–3.

[19] Nishimura K. A microdissection method for detecting thoracic visceral malformations in mouse and rat fetuses. Congenit Anom Kyoto 1974;14:23–40.

[20] Wilson JG. Methods for administering agents and detecting malformations in experimental animals. In: Wilson JG, Warkany J, editors. Teratology: principles and techniques. Chicago: The University of Chicago Press; 1965. p. 262–77.

[21] Goldstein SR, Matsumoto RR, Thompson TL, Patrick RL, Bowen WD, Walker JM. Motor effects of two sigma ligands mediated by nigrostriatal dopamine neurons. Synapse 1989;4:254–8.

[22] Bastianetto S, Rouquier L, Perralt G, Sanger DJ. DTG-induced circling behaviour in rats may involve the interaction between σ sites and nigro-striatal dopaminergic pathways. Neuropharmacology 1995;34:281–7.

[23] Kameyama Y, Tanimura T, Yasuda M, editors. Spontaneous malformations in laboratory animals-photographic atlas and reference data. Congenit Anom Kyoto 1980;20:25–106.

[24] Morita H, Ariyuki F, Inomata N, Nishimura K, Hasegawa Y, Miyamoto M, Watanabe T. Spontaneous malformations in laboratory animals: frequency

of external, internal and skeletal malformations in rats, rabbits and mice. Congenit Anom Kyoto 1987;27:147–206.

[25] Nakatsuka T, Horimoto M, Ito M, Matsubara Y, Akaike M, Ariyuki F. Japan Pharmaceutical Manufacturers Association (JPMA) survey on background control data of developmental and reproductive toxicity studies in rats, rabbits and mice. Congenit Anom Kyoto 1997;37:47–138.

[26] Barnett Jr JF, Lewis D, Tappen A, Hoberman AM, Christian MS. Reproductive indices, fetal gross, visceral and skeletal alterations, sexual maturation, passive avoidance and water maze data, a comparison of results in CD(SD)IGS rats and CD(SD) rats. In: Matsuzawa T, Inoue H, editors. Biological reference data on CD(SD)IGS rats-2000, CD(SD)IGS study group. Yokohama: c/o Charles River Japan, Inc.; 2000. p. 159–73.

Available online at www.sciencedirect.com
SCIENCE DIRECT
Reproductive Toxicology 22 (2006) 30–36
Reproductive Toxicology
www.elsevier.com/locate/reprotox

Reproductive and developmental toxicity screening test of basic rubber accelerator, 1,3-di-*o*-tolylguanidine, in rats

Makoto Ema[a,*], Eisuke Kimura[b], Mariko Matsumoto[a], Akihiko Hirose[a], Eiichi Kamata[a]

[a] *Division of Risk Assessment, Biological Safety Research Center, National Institute of Health Sciences, Tokyo, Japan*
[b] *Panapharm Laboratories Co., Ltd., Uto, Japan*

Received 8 July 2005; received in revised form 1 November 2005; accepted 7 November 2005
Available online 27 December 2005

Abstract

Twelve male and female rats per group were exposed to the rubber accelerator 1,3-di-*o*-tolylguanidine (DTG) by gavage at 0, 8, 20 or 50 mg/kg bw/day. Males were dosed for a total of 49 days beginning 14 days before mating. Females were dosed for a total of 40–49 days beginning 14 days before mating to day 3 of lactation throughout the mating and gestation period. At 50 mg/kg bw/day, deaths were observed in two males and three females. Lowered body weight gain and food consumption were noted in males at 50 mg/kg bw/day and females at 20 and 50 mg/kg bw/day. Mydriasis, decreased locomotor activity, bradypnea, prone position, tremor and/or salivation were observed in males and females at 20 and 50 mg/kg bw/day. No effects of DTG were found on the estrous cyclicity, precoital interval, copulation, fertility and gestational indices, numbers of corpora lutea and implantations, or gestation length. A significant decrease in the number, body weight and viability of offspring and increase in the incidence of fetuses with external malformations were found at 50 mg/kg bw/day. Oligodactyly, anal atresia and tail anomalies were observed. These data suggest that DTG may be teratogenic. The NOAELs of DTG for general and developmental toxicity in rats are 8 and 20 mg/kg bw/day, respectively.

Keywords: Di-*o*-tolylguanidine; Rubber accelerator; Sigma ligand; Reproductive and developmental toxicity; Teratogenicity; Malformation; Rat

1. Introduction

The basic rubber accelerator 1,3-di-*o*-tolylguanidine (CAS No. 97-39-2; DTG) is produced in the million pound range annually in the United States [1,2]. DTG is known as a selective sigma ligand [3]. In this context, many pharmacological studies of DTG were performed [3–12]. Ligands that interact with sigma sites have been shown to produce hypothermia [4–6]. Hypothermia induced by DTG was detected following subcutaneous or intracerebroventricle injection in rats [5,6] and intraperitoneal injection in mice [4]. The intraperitoneal injection of DTG potently reduced the pain behavior in the acute but increased pain behavior in the tonic phase in the formalin test in mice [7]. Intraperitoneal injection of DTG produced significant but short-lived increases in the withdrawal latencies in mice [4]. Bastianetto et al. [8] showed that unilateral intranigral injection caused circulating behavior in rats and suggested that sigma sites play a role in movement and posture through their association with brainstem and forebrain motor control circuits. Decreased locomotor activity induced by intraperitoneal injection [9,10], increased bladder capacity induced by intravenous injection in the anaesthetized condition [11] and no change in immobility time in open field after intraperitoneal injection [12] were also reported in rats given DTG. Toxicological studies on DTG have given little information on acute animal toxicity [13]: intraperitoneal LD50 was 25 mg/kg bw in mice; oral LD50 was 500 mg/kg bw in rats; lowest published lethal dose of oral administration was 80 mg/kg bw in rabbits; and the lowest published lethal dose was 120 mg/kg bw after oral administration in mammals, species unspecified. At the present time, no information is available for the reproductive and developmental toxicity of DTG. It is generally assumed that the results of animal test on chemical toxicity are relevant to human health [14]. As such, the testing for reproductive and developmental toxicity

* Corresponding author. Tel.: +81 3 3700 9878; fax: +81 3 3707 1408.
E-mail address: ema@nihs.go.jp (M. Ema).

0890-6238/$ – see front matter © 2005 Elsevier Inc. All rights reserved.
doi:10.1016/j.reprotox.2005.11.002

in animal models is an important part of the overall toxicology. The present study was conducted to obtain information on the effects of DTG on reproductive and developmental parameters in rats.

2. Materials and methods

This study was performed in compliance with OECD guideline 421 Reproduction/Developmental Toxicity Screening Test [15] and in accordance with the principles for Good Laboratory Practice [16,17] and "Guidance for Animal Care and Use" of Panapharm Laboratories Co., Ltd.

2.1. Animals

International Genetic Standard (Crj: CD (SD) IGS) rats were used throughout this study. This strain was chosen because it is most commonly used in toxic studies, including reproductive and developmental toxicity studies, and historical control data are available. Males and females at 8 weeks of age were purchased from Atsugi Breeding Center, Charles River Japan, Inc. (Yokohama, Japan). The rats were acclimated to the laboratory for 13 days prior to the start of the experiment. Male and female rats found to be in good health were selected for use. Vaginal smears of each female were recorded and only females showing a 4-day estrous cycle were used in the experiment. Male and female rats were distributed on a random basis into four groups of 12 males and 12 females each. Rats were housed individually, except during the acclimation, mating and nursing periods. From day 0 of pregnancy to the day of sacrifice, individual dams and litters were reared using wooden chips as bedding (White Flake; Charles River Japan, Inc.).

Animals were reared on a sterilized basal diet (CRF-1; Oriental Yeast Co., Ltd., Tokyo, Japan) and sterilized water ad libitum and maintained in an air-conditioned room at 24 ± 2 °C, with a relative humidity of 55 ± 10%, a 12-h light/12-h dark cycle and ventilation with 13–15 air charges per hour.

2.2. Chemicals and dosing

DTG was obtained from Sumitomo Chemical Co., Ltd. (Tokyo, Japan). DTG, a white powder, is slightly soluble in hot water and alcohol, soluble in chloroform and very soluble in ether, and its melting point is 179 °C, specific gravity is 1.10 and molecular weight is 239.3 [2]. The DTG (Lot No. 30J08) used in this study was 99.6% pure, and it was kept in a dark place at room temperature. The purity and stability of the chemical were verified by analysis before the study. Rats were dosed once daily by gastric intubation with DTG at a dose of 0 (control), 8, 20 or 50 mg/kg bw. The dosage levels were determined based on the results of our previous dose-finding study, the 14-day repeated dose toxicity study in rats given DTG by gavage at 0, 10, 20, 40 or 80 mg/kg bw/day, in which deaths were found at 80 mg/kg bw/day, decreased locomotor activity, mydriasis, tremor and salivation were observed at 40 and 80 mg/kg bw/day, and no adverse effects were detected at 10 and 20 mg/kg bw/day (data not shown). DTG was suspended in 0.5% (w/v) carboxymethylcellulose-Na solution with 0.1% (w/v) Tween 80. Males (12 rats/group) were dosed for a total of 49 days beginning 14 days before mating. Females (12 rats/group) were dosed for a total of 40–49 days beginning 14 days before mating to day 3 of lactation throughout the mating and gestation period. The volume of each dose was adjusted to 10 ml/kg body weight based on the latest body weight during the re-mating and mating period in males and females or the body weight on day 0 of pregnancy in females after copulation. Control rats were given 0.5% (w/v) carboxymethylcellulose-Na solution with 0.1% (w/v) Tween 80. The stability of formulations has been confirmed for up to 8 days. During use, the formulations were maintained under such conditions for less than 7 days, and the target concentration was 96.5 to 101.4%.

2.3. Observations

All rats were observed daily for clinical signs of toxicity. The body weight was recorded twice a week in males, and twice a week during the pre-mating and mating periods, on days 0, 7, 14 and 21 of pregnancy and on days 0 and 4 of lactation in females. Food consumption was recorded twice weekly during the pre-mating period in males, and twice weekly during the pre-mating period, on days 1, 7, 14 and 21 of pregnancy and on days 1 and 4 of lactation in females. The rats were euthanized by exsanguination under anesthesia on the next day of the last administration in males and on day 4 of lactation in females. The external surfaces of the rats were examined. The abdomen and thoracic cavity were opened, and gross internal examination was performed. In males, the testes and epididymides were weighed. In females, the numbers of corpora lutea and implantation sites and weight of the ovaries were recorded. The testes and epididymides were fixed with Bouin's solution and preserved in 10% neutral buffered formalin, and the ovaries were stored in 10% neutral buffered formalin. Histopathological evaluations were performed on hematoxylin–eosin-stained tissue sections of these organs.

Daily vaginal lavage samples of each female were evaluated for estrous cyclicity throughout the pre-mating period. Each female rat was mated overnight with a single male rat of the same dosage group until copulation occurred or the mating period, 2 weeks, had elapsed. During the mating period, daily vaginal smears were examined for the presence of sperm. The presence of the sperm in the vaginal smear and/or a vaginal plug was considered evidence for successful mating. Once insemination was confirmed, the females were checked for signs of parturition before noon from day 20 of pregnancy. The females were allowed to deliver spontaneously and nurse their pups until postnatal day (PND) 4. The day on which parturition was completed by 12:00 was designated as PND 0. Litter size and numbers of live and dead pups were recorded. Gender was determined on live pups examined grossly and individually weighed on PNDs 0 and 4. On PND 4, the pups were euthanized by exsanguination under anesthesia and gross internal examinations were performed.

2.4. Data analysis

The statistical analysis of pups was carried out using the litter as the experimental unit. The body weight, body weight gain, food consumption, length of estrous cycles, precoital interval, gestation length, weight of the organs, relative organ weight, numbers of corpora lutea, implantations and live and dead pups, total number of pups and weight of live pups were analyzed with Bartlett's test for homogeneity of variance at the 5% level of significance. If homogeneous the data were analyzed using Dunnett's multiple comparison test to compare the mean of the control group with that of each dosage group. If not, the DTG-treated groups were compared with that of the control group with Steel's multiple comparison test. The implantation, delivery and viability indexes, and incidence of pups with anomalies and individual anomalies were analyzed with Wilcoxon's rank sum test. The mortality, copulation, fertility and gestation indexes, and sex ratio of pups were analyzed with Fisher's exact test. The 5% level of probability was used as the criterion for significant.

3. Results

Table 1 shows the findings in male rats given DTG. At 50 mg/kg bw/day, one male died after six administrations and one male died after seven administrations. These dead rats showed mydriasis, decreased locomotor activity, bradypnea, a prone position and tremor 10–20 min after the administration of DTG. In surviving males, mydriasis, decreased locomotor activity, bradypnea and prone position on days 1–9 of the administration period, tremor during the whole period of administration and salivation on days 22–49 of the administration period were also observed at 50 mg/kg bw/day. Salivation was noted on days 28–49 of the administration period at 20 mg/kg bw/day. A significant decrease in the body weight gain was found on days 1–8 (81% decrease) and days 15–22 (48% decrease) of the administration period at 50 mg/kg bw/day. At this dose, significantly lower food consumption on days 7–8 (20% decrease) and days 14–15 (7% decrease) of the administration period was also observed.

Table 1
Findings in male rats given DTG

	Dose (mg/kg bw/day)			
	0 (control)	8	20	50
No. of male rats	12	12	12	12
No. of deaths during pre-mating period	0	0	0	2
Initial body weight (g)[a]	381 ± 16	379 ± 16	378 ± 15	380 ± 16
Body weight gain (g)[a]				
Days 1–8	30 ± 7	33 ± 7	25 ± 7	6 ± 9**
Days 8–15	29 ± 5	32 ± 5	32 ± 7	24 ± 7
Days 15–22	23 ± 6	25 ± 8	23 ± 7	12 ± 11**
Days 22–29	19 ± 9	22 ± 7	25 ± 8	19 ± 5
Days 29–36	22 ± 6	22 ± 6	23 ± 7	18 ± 8
Days 36–43	15 ± 8	12 ± 9	13 ± 5	14 ± 7
Days 43–50	19 ± 8	19 ± 7	13 ± 4	13 ± 11
Food consumption (g/day/rat)[a]				
Days 7–8	25 ± 3	26 ± 3	26 ± 2	20 ± 3**
Days 14–15	29 ± 2	30 ± 2	29 ± 3	27 ± 3*
Days 29–30	27 ± 2	27 ± 3	28 ± 3	25 ± 2
Days 35–36	28 ± 2	29 ± 2	29 ± 2	27 ± 2
Days 42–43	26 ± 3	25 ± 3	27 ± 4	27 ± 3
Days 49–50	28 ± 4	29 ± 3	28 ± 2	28 ± 3

[a] Values are given as the mean ± S.D.
* Significantly different from the control group ($p < 0.05$).
** Significantly different from the control group ($p < 0.01$).

Table 2 presents the findings in female rats given DTG. At 50 mg/kg bw/day, two females died after the first administration and one female died after normal delivery of her pups on day 22 of pregnancy. Mydriasis, decreased locomotor activity, bradypnea, prone position, and tremor and salivation 10–20 min after the administration of DTG were observed in females died after the first administration. These clinical signs and salivation were found during pregnancy and on day of parturition in a female which died after parturition. In surviving females, mydriasis, decreased locomotor activity, bradypnea and prone position on day 1 of the administration period to day 0 of lactation, tremor on day 1 of the administration period to day 5 of pregnancy and salivation on day 4 of pregnancy to day 3 of lactation were observed at 50 mg/kg bw/day. Mydriasis, decreased locomotor

Table 2
Findings in female rats given DTG

	Dose (mg/kg bw/day)			
	0 (control)	8	20	50
No. of female rats	12	12	12	12
No. of deaths during pre-mating period	0	0	0	2
No. of deaths during pregnancy	0	0	0	1
Initial body weight (g)[a]	381 ± 16	379 ± 16	378 ± 15	380 ± 16
Body weight gain (g)[a]				
Days 1–8	19 ± 8	17 ± 7	11 ± 6*	−1 ± 9**
Days 8–15	10 ± 7	15 ± 8	20 ± 5**	15 ± 10
Days 0–7 of pregnancy	34 ± 6	31 ± 6	33 ± 4	28 ± 8
Days 7–14 of pregnancy	34 ± 5	34 ± 4	36 ± 3	30 ± 10
Days 14–21 of pregnancy	85 ± 17	100 ± 14	105 ± 9*	42 ± 21**
Days 0–4 of lactation	20 ± 19	14 ± 16	22 ± 9	16 ± 13
Food consumption (g/day/rat)[a]				
Days 7–8	22 ± 3	21 ± 2	19 ± 2**	13 ± 3**
Days 14–15	20 ± 4	22 ± 3	22 ± 2	20 ± 2
Days 6–7 of pregnancy	22 ± 3	23 ± 2	23 ± 3	17 ± 3**
Days 13–14 of pregnancy	23 ± 2	24 ± 3	25 ± 2	22 ± 5
Days 20–21 of pregnancy	24 ± 4	26 ± 3	29 ± 3*	21 ± 5
Days 3–4 of lactation	41 ± 5	41 ± 3	46 ± 4*	32 ± 6**

[a] Values are given as the mean ± S.D.
* Significantly different from the control group ($p < 0.05$).
** Significantly different from the control group ($p < 0.01$).

Table 3
Reproductive findings in rats given DTG

	Dose (mg/kg bw/day)			
	0 (control)	8	20	50
No. of pairs	12	12	12	10
Length of estrous cycles (day)[a]	4.0 ± 0.2	4.1 ± 0.3	4.1 ± 0.3	4.1 ± 0.2
Precoital interval (day)[a]	3.0 ± 1.0	2.7 ± 1.0	2.4 ± 1.1	2.2 ± 1.0
Copulation index (%)[b]				
Male	100	91.7	100	100
Female	100	91.7	100	100
Fertility index (%)[c]	100	100	91.7	100
Gestation index (%)[d]	100	100	100	90.0
Gestation length (day)[a]	22.6 ± 0.5	22.3 ± 0.5	22.5 ± 0.5	22.6 ± 0.5
Weight of testes (g)[a]	3.24 ± 0.34	3.34 ± 0.19	3.31 ± 0.28	3.30 ± 0.24
Relative weight of testes[a,e]	0.60 ± 0.05	0.62 ± 0.07	0.63 ± 0.07	0.68 ± 0.07*
Weight of epididymides (g)[a]	1.16 ± 0.10	1.21 ± 0.06	1.21 ± 0.12	1.23 ± 0.07
Relative weight of epididymides[a,e]	0.22 ± 0.02	0.22 ± 0.02	0.23 ± 0.03	0.25 ± 0.02**
Weight of ovaries (mg)[a]	101 ± 8	106 ± 6	101 ± 11	102 ± 10
Relative weight of ovaries[a,e]	30 ± 2	31 ± 2	28 ± 3	32 ± 2

[a] Values are given as the mean ± S.D.
[b] Copulation index (%) = (no. of rats copulated/no. of pairs) × 100.
[c] Fertility index (%) = (no. of females pregnant/no. of females copulated) × 100.
[d] Gestation index (%) = (no. of females with parturition/no. of females copulated) × 100.
[e] Relative weight = organ weight/100 g of body weight.
* Significantly different from the control group ($p < 0.05$).
** Significantly different from the control group ($p < 0.01$).

activity, bradypnea and prone position on days 2–3 of the administration period, and salivation on day 14 of pregnancy to day 3 of lactation were observed at 20 mg/kg bw/day. Body weight gain was significantly lowered on days 1–8 of the pre-mating period at 20 mg/kg bw/day (42% decrease) and on days 1–8 of the pre-mating period (105% decrease) and days 14–21 of pregnancy (49% decrease) at 50 mg/kg bw/day. At 20 mg/kg bw/day, a significantly higher body weight gain was observed on days 8–15 of the pre-mating period and days 14–21 of pregnancy. Food consumption was significantly reduced on days 7–8 of the pre-mating period at 20 mg/kg bw/day (14% decrease) and on days 7–8 of the pre-mating period (41% decrease) and days 3–4 of lactation (24% decrease) at 50 mg/kg bw/day. At 20 mg/kg bw/day, a significant increase in the food consumption was observed on days 20–21 of pregnancy and days 3–4 of lactation.

The reproductive findings in rats given DTG are presented in Table 3. No effects of DTG were observed on the length of estrous cycles, precoital interval and gestation length. One pair did not copulate at 8 mg/kg bw/day, one female did not become impregnated at 20 mg/kg bw/day and one female did not deliver any pups at 50 mg/kg bw/day; however, no significant differences were noted in the copulation, fertility or gestation index between the control and DTG-treated groups. The weights of the testes and epididymides, and absolute weight and relative weight of the ovaries in the DTG-treated groups did not differ from the control group. The relative weights of the testes (13% increase) and epididymides (14% increase) were significantly higher at 50 mg/kg bw/day.

The developmental findings in rats given DTG are shown in Table 4. There was no significant difference in the numbers of corpora lutea, implantations and stillborns, implantation index, sex ratio of live pups, viability index on day 0 of lactation and body weight of live pups on day 4 of lactation between the control and DTG-treated groups. The numbers of pups delivered (45% decrease) and live pups delivered (45% decrease) and delivery index (43% decrease) were significantly lowered at 50 mg/kg bw/day. At this dose, the viability index on day 4 of lactation (34% decrease) and body weight of live male (16% decrease) and female (19% decrease) pups on day 0 of lactation were also significantly decreased. Two dams with totally litter loss were observed. No poor maternal behavior or nursing was observed in dams at 50 mg/kg bw/day. No histopathological changes were found in the testes, epididymides and ovaries in the DTG-treated groups. External anomalies in pups of rats given DTG are also presented in Table 4. No fetuses with external malformations were observed in the control and groups given DTG at 8 and 20 mg/kg bw/day. At 50 mg/kg bw/day, fetuses with external malformations were found in 10 out of the 65 fetuses and in 3 out of the 9 litters. Oligodactyly was observed in four pups in two litters. A kinked tail was found in six pups in one litter and a short tail and anal atresia was observed in one pup in each letter. Although there was no significant difference in the incidence of fetuses with individual malformations between the control and 50 mg/kg bw/day groups, a significantly higher incidence of total number of fetuses with external malformations was noted at this dose.

Table 4
Developmental findings in rats given DTG

	Dose (mg/kg bw/day)			
	0 (control)	8	20	50
No. of litters	12	11	11	9
No. of implantations[a]	14.3 ± 2.6	16.2 ± 1.9	15.9 ± 1.4	14.2 ± 3.6
Implantation index (%)[b]	92.2	94.7	97.6	90.9
No. of pups delivered[a]	13.0 ± 2.4	15.2 ± 2.0	14.7 ± 1.4	7.2 ± 4.1**
No. of live pups delivered[a]	13.0 ± 2.4	15.1 ± 1.9	14.7 ± 1.4	7.2 ± 4.1**
No. of stillborns	0	0.1 ± 0.3	0	0
Delivery index (%)[c]	91.0	93.3	92.2	51.7**
Sex ratio of live pups (males/females)	71/85	84/82	80/82	31/34
Viability index (%)[d,e]				
Day 0 of lactation	100	99.5	100	100
Day 4 of lactation	99.4	99.4	100	65.4**
Body weight of male pups during lactation (g)[a]				
Day 0	7.4 ± 0.7	6.9 ± 0.6	7.3 ± 0.6	6.2 ± 1.0**
Day 4	11.9 ± 1.3	11.1 ± 1.0	11.7 ± 1.0	11.0 ± 2.3
Body weight of female pups during lactation (g)[a]				
Day 0	7.0 ± 0.7	6.6 ± 0.6	6.8 ± 0.7	5.7 ± 0.8**
Day 4	11.4 ± 1.3	10.5 ± 1.0	11.0 ± 0.9	10.5 ± 2.0
External examination of pups				
No. of pups (litters) with malformations	0	0	0	10 (3)*
Oligodactyly	0	0	0	4 (2)
Kinky tail	0	0	0	6 (1)
Short tail	0	0	0	1
Anal atresia	0	0	0	1

[a] Values are given as the mean ± S.D.
[b] Implantation index (%) = (no. of implantations/no. of corpora lutea) × 100.
[c] Delivery index (%) = (no. of live pups delivered/no. of implantations) × 100.
[d] Viability index on day 0 of lactation (%) = (no. of live pups delivered/total no. of pups delivered) × 100.
[e] Viability index on day 4 of lactation (%) = (no. of live pups on day 4 of lactation/no. of live pups delivered) × 100.
* Significantly different from the control group ($p < 0.05$).
** Significantly different from the control group ($p < 0.01$).

4. Discussion

The present study was conducted to obtain initial information on the possible effects of DTG on reproduction and development in rats. The data show that DTG exerts developmental toxicity and suggest that DTG possesses teratogenic potential.

DTG was given to males during the pre-mating and mating periods and to females during the pre-mating, mating, pregnancy and shortly after parturition. The dosage used in the present study was sufficiently high such that it should be expected to induce general toxic and neurobehavioral effects. As expected, general toxicity, such as decreases in body weight gain and food consumption, was found at 50 mg/kg bw/day in males and at 20 and 50 mg/kg bw/day in females. Decreases in the body weight gain and food consumption during the early administration period, and thereafter, significant increases in body weight gain and food consumption were observed in females at 20 mg/kg bw/day. One possible explanation for increased body weight gain during late pregnancy at 20 mg/kg bw/day may be higher number of pups and higher net weight gain during pregnancy at this dose compared with the controls. Such recovery did not occur at the highest dose. Neurobehavioral effects, such as mydriasis, decreased locomotor activity, bradypnea, prone position, tremor and salivation, were also observed at 20 and 50 mg/kg bw/day. DTG is a specific sigma receptor ligand [3] and sigma receptor ligands can modulate neurotransmissions, including the noradrenergic, glutamatergic and dopaminergic system [10,18,19]. It was reported that systemic injection of DTG caused neurobehavioral changes in rats [5,6,9,10]. The present study shows that the oral administration of DTG also induces neurobehavioral changes, and it is neurobehaviorally toxic at 20 and 50 mg/kg bw/day in rats.

Higher relative weights, but not the absolute weight, of the testes and epididymides were observed at 50 mg/kg bw/day. Body weights of male rats on the day of scheduled sacrifice were 537 and 485 g in the control and 50 mg/kg bw/day groups, respectively. It seems likely that the higher relative weights of the testes and epididymides at the highest dose were due to secondarily lowered body weight but not due to the direct effects of DTG on the male reproductive organs. Other male reproductive parameters were not significantly changed, even at the highest dose. These findings suggest that DTG is not reproductively toxic to male rats. It seems unlikely that DTG exerts reproductive toxicity to female rats when administered during the pre-mating, mating, pregnancy and early lactation period, because no adverse effects on the maternal reproductive parameters, including estrous cyclicity, precoital interval, copulation

index, fertility index, gestation index, gestation length and ovarian weight, were caused by the administration of DTG in females.

As for the developmental indexes, decreases in the numbers of total pups and live pups delivered, delivery index, viability on PND 4 and body weight of live pups on PND 0 were detected at 50 mg/kg bw/day. These findings indicate that DTG is toxic to the survival and growth of offspring and exerts developmental toxicity at 50 mg/kg bw/day in rats.

In the present study, the teratogenic effect of DTG is strongly suggested by the external examinations of pups. At 50 mg/kg bw/day, a significant increase in the total number of fetuses with external malformations was noted; however, incidences of fetuses with individual types of external malformations at this dose were not significantly different from those in the control group. The external malformations observed in the present study are of the types that occur spontaneously among control rat fetuses reported in the literature [20–23]. In the present study, only external examination in the newborn rats was performed, and no internal or skeletal examinations were performed. Even animals not ordinarily carnivorous, including nonhuman primates, are likely to eat dead and moribund offspring, as well as those with malformations that involve skin lesions allowing the loss of body fluids or the exposure of viscera [24]. To accurately evaluate the prenatal developmental toxicity including teratogenicity, it is necessary to interrupt pregnancy 12–24 h before the expected term either by hysterectomy or the necropsy of maternal animals [24,25]. The present study was performed in compliance with OECD guideline 421 Reproduction/Developmental Toxicity Screening Test [15], and this screening test guideline does not provide complete information on all aspects of reproduction and development due to the relatively small numbers of animals in the dose groups and selectivity of the endpoints. In order to further evaluate the developmental toxicity, including teratogenicity, of DTG in rats, a prenatal developmental toxicity study is currently in progress.

In conclusion, DTG caused decreased body weight gain and food consumption at 50 mg/kg bw/day in males and at 20 and 50 mg/kg bw/day in females, neurobehavioral changes at 20 and 50 mg/kg bw/day in both sexes, and changes in developmental parameters at 50 mg/kg bw/day. DTG is suggested to be teratogenic. The NOAELs of DTG for general and developmental toxicity were 8 and 20 mg/kg bw/day, respectively, in rats.

Acknowledgements

This study was performed in 2002 at the Panapharm Laboratories Co., Ltd. (Uto, Japan) and supported by the Ministry of Health, Labour and Welfare, Japan.

References

[1] Scorecard. Chemical profile for 1,3-bis(*o*-tolyl)guanidine (CAS number: 97-39-2); 2005 [http://www.scorecard.org/chemical-profiles/summary.tcl?edf_substance_id=+97-39-2].

[2] TOXNET. *N,N'*-Bis(2-methylphenyl)guanidine; 2005 [http://toxnet.nlm.nih.gov/cgi-bin/sis/search/f?/temp].

[3] Weber E, Sonders M, Quarum M, Mclean S, Pou S, Keana JFW. 1,3-Di (2-(5-^{3}H)tolyl)guanidine: a selective ligand that labels σ-type receptors for psychotomimetic opiates and antipsychotic drugs. Proc Natl Acad Sci 1986;83:8784–8.

[4] Kest B, Mogil JS, Sternberg WF, Pechnick RN, Liebeskind JC. Antinociception following 1,3-di-*o*-tolylguanidine, a selective σ receptor ligand. Pharmacol Biochem Behav 1995;50:587–92.

[5] Bejanian M, Pechnick RN, Bova MP, George R. Effects of subcutaneous and intracerebroventricular administration of the *sigma* receptor ligand 1,3-di-*o*-tolylguanidine on body temperature in the rat: interactions with BMY 14802 and rimcazole. J Pharmacol Exp Ther 1991;258:88–93.

[6] Rawls SM, Baron DA, Geller EB, Adler MW. Sigma sites mediate DTG-evoked hypothermia in rats. Pharmacol Biochem Behav 2002;73:779–86.

[7] Kest B, Mogil JS, Sternberg WF, Pechnick RN, Liebeskind JC. 1,3-Di-*o*-tolylguanidine (DTG) differentially affects acute and tonic formalin pain: antagonism by rimcazole. Pharmacol Biochem Behav 1995;52:175–8.

[8] Bastianetto S, Perralt G, Sanger DJ. Pharmacological evidence for the involvement of sigma sites in DTG-induced contralateral circling in rats. Neuropharmacology 1995;34:107–14.

[9] Maj J, Rogóż Z, Skuza G. Some behavioral effects of 1,3-di-*o*-tolylguanidine, opipramol and seritraline, the sigma site ligands. Pol J Pharmacol 1996;48:379–95.

[10] Skuza G, Rogóż Z. Effects of 1,3-di-*o*-tolylguanidine (DTG), rimcazole and EMD 57445, the σ receptor ligands, in the forced swimming test. Pol J Pharmacol 1997;49:329–35.

[11] Shimizu I, Kawashima K, Ishii D, Oka M. Effects of (+)-pentazocine and 1,3-di-*o*-tolylguanidine (DTG), sigma (σ) ligands, on micturition in anaesthetized rats. Brit J Pharmacol 2000;131:610–6.

[12] Skuza G, Rogóż Z. Sigma receptor antagonists attenuate antidepressant-like effect induced by co-administration of 1,3di-*o*-tolylguanidine (DTG) and memantine in the forced swimming test in rats. Pol J Pharmacol 2003;55:1149–52.

[13] RTECS (The Registry of Toxic Effects of Chemical Substances). Guanidine, 1,3-di-*o*-tolyl; 2005 [http://www.cdc.gov/niosh/rtecs/mf155cc0.html].

[14] Clayson DB, Krewski DR. Objectives of toxicity testing. In: Arnold DL, Grice HC, Krewski DR, editors. Handbook of in vivo toxicity testing. San Diego: Academic Press; 1990. p. 3–18.

[15] OECD (Organization for Economic Co-operation and Development). OECD Test Guideline for Testing of Chemicals, No. 421, Reproduction/Developmental Toxicity Screening Test. Adopted by the Council on 27th July 1995. Paris; 1995.

[16] OECD (Organization for Economic Co-operation and Development). OECD Principles on Good Laboratory Practice (as revised in 1997). OECD Series on Principles of Good Laboratory Practice and Compliance Monitoring, No. 1. Paris; 1998.

[17] EA, MHW and MITI (Environment Agency, Ministry of Health and Welfare, and Ministry of International Trade and Industry of Japan). Research of Designated Chemical Substances, Planning and Coordination Bureau, Environment Agency, No. 39, Environmental Health Bureau, Ministry of Health and Welfare, No. 229, Basic Industries Bureau, Ministry of International Trade and Industry, No. 85, March 31, 1984, and amendments, November 18, 1988. Tokyo; 1988.

[18] Goldstein SR, Matsumoto RR, Thompson TL, Patrick RL, Bowen WD, Walker JM. Motor effects of two sigma ligands mediated by nigrostriatal dopamine neurons. Synapse 1989;4:254–8.

[19] Bastianetto S, Rouquier L, Perralt G, Sanger DJ. DTG-induced circling behaviour in rats may involve the interaction between σ sites and nigrostriatal dopaminergic pathways. Neuropharmacology 1995;34:281–7.

[20] Kameyama Y, Tanimura T, Yasuda M, editors. Spontaneous malformations in laboratory animals—photographic atlas and reference data. Cong Anom 1980;20:25–106.

[21] Morita H, Ariyuki F, Inomata N, Nishimura K, Hasegawa Y, Miyamoto M, et al. Spontaneous malformations in laboratory animals: frequency of external, internal and skeletal malformations in rats, rabbits and mice. Cong Anom 1987;27:147–206.

[22] Nakatsuka T, Horimoto M, Ito M, Matsubara Y, Akaike M, Ariyuki F. Japan Pharmaceutical Manufacturers Association (JPMA) survey on

background control data of developmental and reproductive toxicity studies in rats, rabbits and mice. Cong Anom 1997;37:47–138.

[23] Barnett Jr JF, Lewis D, Tappen A, Hoberman AM, Christian MS. Reproductive indices, fetal gross, visceral and skeletal alterations, sexual maturation, passive avoidance and water maze data, a comparison of results in CD(SD)IGS rats and CD(SD) rats. In: Matsuzawa T, Inoue H, editors. Biological reference data on CD(SD)IGS rats-2000, CD(SD)IGS study group. Yokohama: c/o Charles River Japan, Inc.; 2000. p. 159–73.

[24] Wilson JG. Collection and interpretation of results. In: Wilson JG, editor. Environment and birth defects. New York: Academic Press; 1973. p. 173–93.

[25] Wilson JG. Methods for administering agents and detecting malformations in experimental animals. In: Wilson JG, Warkany J, editors. Teratology: principles and techniques. Chicago: The University of Chicago Press; 1965. p. 262–77.